

二次元ぷち文庫

試し読み版

武器乙女の うつつわ

EP0 長刀クイーン誕誕



天戸祐輝

表紙イラスト 秋月からす

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『武具乙女のうつわ EPO 前編 長刀クイーン誕従』
『武具乙女のうつわ EPO 後編 長刀クイーン誕従』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



武具乙女の うつつわ

EPO 長刀クイーン誕従

天戸祐輝

表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

そううるかみ

爪雨瑠香魅

かつてオラクルに犯された過去を持つ全国でも有名な長刀の使い手。自分を陵辱した相手を強く憎み、探し求めている。砥意との精神的・肉体的な繋がりを持ち、契約している。

こぼうとい

弧棒砥意

見た目は子供だが、長刀に変化できる武具能力者。戦闘能力は契約者に依存するため、最強クラスの戦闘力を誇る。

こうどうりゅうふ

恒導琉不

かつて瑠香魅を陵辱したオラクル。数百年を生き長らえ、多数の者と契約するなど、強大な力を持っている。

フオンツ！ シュツシュツ……シュサツ！

珍しい長刀部。
なぎなた

その部活に割り当てられた学園の道場で、白衣に紺の袴を纏まとった一人の少女が、模造された長い得物を自由自在に振り回していた。

素足の彼女が床を踏み締める度に、クールな雰囲気纏う大人びた輪郭の顔に玉のような汗が伝い、毛先を太腿にまで伸ばした黒いポニーテールが流れるように宙を泳ぐ。

切れ長な紫の瞳は、まるで目に見えない相手を射抜くように睨み、形のいい唇が運動しているとは思えないほど整った呼吸音を繰り返す。

「はあああああつ！」

ブウオンツ！

気合の声とともに模造の三日月刃を振り下ろした途端。道場に一陣の風が吹き、彼女を見ていた後輩たちの道着の裾を揺らす。

同時に、運動するには邪魔な大きな胸元が揺れ、上着の合わせ目が乱れた。

「すごいです爪雨先輩そうらっ。さすが全国に敵なしの美少女剣士ですっ」

一流れを終わらせた彼女に、後輩の女子が黄色い声をあげる。

整った顔に長く美しい黒髪。十代後半の爪雨瑠香るか魅は、誰もが認める美貌を持つ少女だ。ほとんど表情を変えない姿も、クールな雰囲気醸してミステリアスであり、年下の同

性が黄色い声をあげるのも納得ができる。

しかも、彼女は一般的な女子と比べても長身であり、長刀で鍛えられた肢体も細くてスタイルがいい。そのくせ、上着の前合わせを膨らませている胸はEカップはある釣鐘型で大きく、袴の紐で縛っている腰はうっとりするほど括れている。

胸ほど大きくないがお尻も魅力的で、この私立怜遥学園の中では密かに人気のある存在だ。

「ふうう……。もう、そんなに褒めないで。それに、私は美少女剣士なんかではないわ」
乱れていない呼吸で深い息を吐き、切れ長な瞳で後輩の姿を映す。それだけで、彼女に話しかけた後輩は、そんな趣味もないのに顔を赤らめる。

溜香魅と同じ空間に居る。それだけでも、後輩の女子には特別なことだ。

彼女が密かに人気なのは容姿だけではなく、悪を絶対に許さないという潔癖な性格もあってのことだ。

すこし前だが、学園に現われた変質者を一瞬で倒したという経歴も持っている。

最近では、この学園がある街は異質な暴行や強姦事件が多発しているため、溜香魅のように強くて美しい少女は羨望的の的。

そしてなにより、彼女は人を選ばずに優しく声をかけ、困っている人を見て見ぬ振りなどできない。

その性格が、同性すらも惹き付けてやまないのである。

「ああんっ。わたしも爪雨先輩のように強くて綺麗ならなあ〜」

「クスッ、ありがとう。でも、私はもつと強く……強くならなくては」

後輩に優しい笑みで答えた直後。彼女は手に持っていた模造長刀を見ながら、沈んだ声で呟く。

強くなりたい。それは、長刀術を学ぶ彼女だけではなく、武術を極めようとする者すべてが持つ願望だ。

しかし、学園の最上級生である四学年の溜香魅には、そんな望みなど必要はない。

彼女は出る大会のすべてを数秒で勝利し、木造の長刀で相手の得物を簡単に叩き折るほどの實力を持つ。

長刀界に現われた神劍の美少女。それが、彼女の別名だった。

「そんな、爪雨先輩は、もう十分に強いですよ〜」

「そんなことはないわ。私はもつと強くならなければ……」

気軽な後輩の言葉がかけられる中。溜香魅は長いポニーテールを流星のように宙で泳がせ、玉の汗を飛び散らせながら長刀を振り続けた。

※

人の居ない夜の河川敷。その鉄橋下のフェンスに囲まれた立ち入り禁止の場所に訪れる

のは、学園から下校する溜香魅にとって儀式とも言える習慣だった。

「ここで私は……っ」

今思い出しても、おぞましさと吐き気で全身に鳥肌が立つ。

敵なしと有頂天になっていた二年前。彼女はここで鎧武者の化け物に襲われ、何度も肢体を穢された。

汚らしいペニスを口に、胸に、処女だった秘孔に突き込まれて火傷するような精液を注がれ、肢体中にぶちまけられた感触。

その穢れた感触が、今でも鮮明に肉体に残っている。

そして、泣き叫びながら陵辱されるだけだった屈辱。それを思い出すだけでも、すべてを破壊したい衝動に駆られてしまう。

その忌まわしい過去が、今の彼女に強さを求めさせる理由だ。

あのときの悔しさと悲しみが心に深く刻まれ、いつか再び相まみえたときに復讐しようと決めている。

それに最近多発している事件は、あのとき自分を陵辱した男が起こしているのかもしれない。

復讐を果たすためにも、そしてこれ以上の犠牲者を出さないためにも、溜香魅はもっと強くなろうと心に誓う。

「必ず見つけ出して、この手で復讐を果たしてあげるわっ」

唇を噛み締めて模造長刀を握った彼女は、長いポニーテールをフワリと浮かして踵きびすを返し、弱かった自分への戒めと、化け物鎧武者への復讐を誓う場所から離れていく。

「ひっひっ、こんなところで女の子の一人歩きは危ないなあ……」

河川敷に吹くそよ風。その心地いい風に頬を撫でられながら帰宅しようとした彼女に、一人の男が話しかけてきた。

年齢は四十代の始め。短い髪にホームベースのように角ばった顔。そして、やたらと筋肉の付いたアメフト選手のような体軀たいくの大男。

その大男が、薄汚れたTシャツとチノパン姿で、いやらしく目尻を下げて彼女を見つめている。

「俺が家まで送って行ってやろうかあ？」

「お氣遣いなく」

一言だけ答えて、大男から離れる。

見ただけで、この大男が変質者だと理解できた。

話し方とこの態度。それだけで、この男を理解するには十分である。

「そんなに冷たくするなよお。一人で歩いていたら襲われるかもしれないぜえ」

「くっ」

軽くあしらおうとしたが、大男はしつこく彼女に話しかけ、歩みをとめるように溜香魅の顔を立ち塞ぐ。

大男がそこまで固執するのも当然だ。

今の彼女は学園帰りで制服姿。しかも、下校前に部活の汗をシャワーで流したために、妙な艶めかしさを自然に振り撒いている。

白い半袖ブラウスと藍色のベストに包まれた胸は、道着のとき以上に大きな肉果実を揺らし、紅いネクタイが妖絶さを醸すように胸の谷間を彩っていた。

紅いミニプリーツスカートノウエストに締められた腰は、その細さを強調して月の光を浴び、ヒラヒラとひるがえるスカート裾が若々しい太腿を魅惑的に見せる。

大男の目は、彼女の艶やかなポニーテールから胸元。括れた細腰。スカートに包まれたお尻。そしてムチムチとした太腿から、紺のハイソックスに彩られた細脚を舐めるように見直し、整った美貌に戻ってきた。

(下衆な男ね。遠慮もなく、ジロジロと身体を見回すなんて……)

不快を感じながらも、あえて気づかない振り。

溜香魅に下心を丸出しにして声をかけてくる男は、いつも同じ態度。

細い肢体を舐めるように見回して胸の大きさやお尻を確かめ、太腿で欲情を掻き立てて顔に視線を戻す。

そして、次の言葉は……。

「送ってやると言ってるんだから、だまって送られるよお。でもその代わり、すこしその身体で楽しませてくれよお」

これだ。

こんな下衆が、善意で声をかけてくるはずがない。

大男は自分の欲望を叶えようと、涎を垂らしながら長刀美少女の細い手首を掴み、河川敷の草むらの中に引つ張り込んでいく。

「やめなさいっ、放してよっ！」

「いいじゃないかよお。一緒に楽しもうぜえ」

ずるずると草むらの中に引つ張られ、身体のすべてが隠れるほど葦あしが茂った場所へと連れ込まれた。

「いい加減にしてっ！」

バシッ！

「ぐうあっ！」

嫌悪の言葉とともに模造長刀を振るい、細い手首を掴む大男の手を叩く。

こんな暴拳をする男は初めてではない。

今まで力づくで溜香魅の身体を手に入れようとした男は何人もいた。が、彼女はそのす

べてを、瞬殺とも言えるスピードで返り討ちにしてきたのだ。

「この、クソ女がああああっ！」

「下衆な男は、みんな同じね」

大男がその体軀で溜香魅を押し倒そうと、体重を利用して飛びかってくる。しかし、そんな攻撃など無意味。

模造長刀を構えた美少女は、半歩動いただけでその攻撃をかわし、そのまま相手の背中へと模造長刀の三日月刃を叩き込む。

「ぐえっ!!」

短い呻きとともに、大男が地面に突っ伏す。

「ふう。帰ってシャワーを浴びないと……」

相手を気絶させる一撃。

その攻撃の手応えを感じながら、頬に付いた葉っぱを払った直後。気絶したはずの大男が彼女の背後に立った。

「なっ!?!」

確かな手応えはあった。それなのに、即座に立ち上がってきた相手に驚きを隠せない。

「いい打撃だったぜえ……」

首をコキコキと鳴らしながら声を低くした大男が、威圧感を増した声で話しかけてくる。

「だまって犯されていけばいいものを……。このクソ女があつ！」

怒声とともに大男が突つ込んできた。しかも、今度はかなりのスピードだ。

「これくらいでっ」

驚きながらも、跳ねるように飛んで大男をかわす。が、かわした際に互いの間で巻き起こった風が制服のスカートを捲り、黒い紐ショーツが露わになってしまう。

「ずいぶんとエロい下着じゃねえか。この売女ばいたがおつ！」

下着を見た大男が体勢を立て直し、涎を垂らして殴りかかってくる。

「いい加減にしなさいっ！」

バシッ！

自分を侮蔑する言葉に吐き気を感じながらも、身体を独楽こまのように回転させて拳をかわし、遠心力をタップリと乗せた長刀を大きな背中へと叩き込む。

「ぐがっ!? 調子に乗るなよ、この小娘えっ！」

「——っ!?!」

気絶して倒れるはずの攻撃。それにもかかわらず、大男は下から突き上げるように拳を繰り出してきた。

あまりにすごいアッパーに驚き、彼女は当たってもいないのに尻餅をついてしまう。
(手を抜いて勝てる相手じゃないっ)

咄嗟とつさにそう感じた。

命を奪う覚悟で戦わなければならぬ相手。

この大男はそんな敵だ。そして、そんな相手を前に、瑠香魅は全力を出せる喜びを感じ始める。

「後悔させてやるぞ小娘え……。何度も貫いて泣き叫ばせ、膾が使い物にならなくなるまで犯してやるぜえ」

はらわたが煮えくり返るような言葉を吐いた大男が、いきなり筋肉を隆起させて木目を浮き上がらせ、人でありながらも別の生き物に変化していく。

「こっ、これは……っ!？」

肉体を変化させる相手に、思わず驚きの言葉を洩らす。

人とは思えない威圧感に身体は動くのを忘れ、見開いた紫の瞳が大男の姿を映したまま離れない。

しかし、そんな変化に畏怖を感じたのも束の間。すぐに心の底から嬉しさが込み上げてきた。

人でありながらも別の生き物。まるで化け物と呼ぶに相応しいそんな敵には、二年前に一度会ったことがある。

自分の肢体を穢した相手とは違うが、本能的に分かる同種の敵。

そんな化け物の姿に、瑠香魅の全身が喜びで震えていく。

「なにを笑っていやがるう」

低くドスのきいた大男の声に、初めて自分が笑みを浮かべていることに気づいた。

自分の処女を奪い肉体を穢した相手と同種の敵。そんな化け物を今から叩きのめせると思うと、笑みを浮かべるのをやめられない。

「笑っている……当然ね。今からおまえのような化け物を倒せると思ったら、面白くてたまらないわっ！」

ブオンッ！ シュツシュツ！ シュサツ！

「ぐうおあっ!!」

叫ぶと同時に模造長刀を振り回し、空気を切断するように乱撃を繰り返す。

あまりに速い長刀の旋風と斬撃に、瑠香魅の周りの大気は小さな竜巻でも起こったように渦を巻き、長い黒髪のポニーテールと制服のミニスカートが空に向かってひるがえる。

模造の三日月刃は、振り回される度に強烈な打撃きょうれつを繰り返し、彼女を襲おうとしていた大男の皮膚を叩き裂いた。

「楽しいっ、楽しいわっ！」

笑いがとまらない。

全力で人と戦える。それだけでも嬉しいのに、模造の長刀を下ろしている相手は自分を

小さなクレーターを作り、葦の林の中に狭い空き地を作った。

「な、なんて威力なのっ!？」

さすがに驚きを隠せない。

肉体を変化させた化け物とはいえ、この拳の威力は予想外。

直撃したら身体が肉片になって飛び散り、形すら残らないだろう。

「普通の人間にしてはいい反応だ。なら、これはかわせるかなあつ！」

攻守逆転した大男が笑いながら拳を振り上げ、右手を棍棒の形に変化させて振り下ろす。身体だけではなく、腕を野蛮な武器に変えて攻撃してくる大男。しかし、そんな変化に驚いている暇などない。

（避けなければ……避けなければ殺されるっ!）

本能で感じる生命の危機に、腕が変化した棍棒を紫の瞳に映しながら避けようとする。

「えっ!？」

だが、身体が動かない。

初めて見る肉体を武器にする男。そして、その相手が見せた人間を叩き壊すだけの暴力的な武器に、両脚が震えているのだ。

「くっ！」

心では制しきれない恐れに、唇を噛み締めながら模造長刀を横に構え、長柄で棍棒を受

け止めようと試みる。

「そんなオモチャみたいなので、この俺をバカにしているのかあつ！」
バキッ！

「くふううふう——っ！」
考えが甘すぎた。

振り下ろされた大男の右腕棍棒は、簡単に模造長刀の長い柄を砕き折り、そのまま彼女の身体をかすめて地面に突き刺さった。

強力な一撃に、瑠香魅の着ていた藍色のベストと白い半袖ブラウスの胸元が裂け、黒いハーフカットプブラに包まれた肉果実が露わになってしまう。

「こ、こんなことって……」

竦んだ身体から力が抜け、両膝が地面に崩れ落ちていく。

化け物鎧武者に犯されてから復讐を誓い、今までずっと鍛錬してきた時間を無駄にされた気分だ。

人間ではない化け物。そんな相手には永遠に勝つことができない。

そんな現実を突き付けられた気さえする。

「最初から大人しく犯されていればいいものを。さっそく楽しませてもらうぜえ」
「くあうっ!!」

武器を失った瑠香魅に、もう抗う手段などない。

変化させていた身体を元の人間に戻した相手に、彼女は小さなクレーター状になった地面に押し倒された。

「や、やめ……っ」

バシッバシッ！

背中を地面に打ち付けた痛みを感じながらも、身体の上のしかかかってきた大男に拳を叩き込む。

しかし、相手は人間に戻ったものの、体格の違う大男だ。

鍛えられた長刀の達人とはいえ少女である彼女の抵抗は、相手にダメージを与えられず、逆に自分の拳に痛みを走らせてしまう。

「放せっ！ またこんな……」

また犯される、そんな悔しさが込み上げる。

二年前の屈辱から鍛え上げていたが、何の意味もなさない。

自分が非力なただの少女でしかない現実を再び思い知らされた感覚に、切れ長な紫の瞳に涙が浮かぶ。

「たつぷり楽しもうぜえ、くひひひひ」

「ん……や……さわるなああっ！」

自分でもどうしてキスをしたのか分からない。ただ、どうしようもなく彼が欲しい。

「お、おねえちゃん……ん……ん……っ!？」

戸惑う彼の舌に舌をからませながらベッドに座らせ、Eカップの胸を服越しに押し当てながらズボンの股間に手を伸ばす。

(硬いつ、もうこんなになつて……)

掌から伝わってくる熱と硬さ。

それだけで彼が興奮しているのが分かる。

今まで自分を穢すことしかしてこなかった男の醜いペニス。嫌悪と憎しみしか感じないそんな生殖器官。

しかし、砥意のモノにはそんな感情を抱かなかった。

「嬉しい、こんなに興奮してくれるなんて……」

この硬いのが自分の中に入って快楽を与えてくれる。

そんな肉欲と喜びが、心の奥から湧いてくるのだ。

手はズボン越しに何度も彼のペニスを撫で上げ、自分の感情を伝えるように熱いキスを繰り返しながら舌をからませ合う。

「ボ、ボクそんなにされたら……」

「じゃあ、私の胸をさわって」



女の子みたいな反応をする彼に、溜香魅はズボンから手を離して藍色のベストと白いブラウスのボタンを外し、黒いブラに包まれた肉果実を露わにした。

「おねえちゃんのおっぱい……はむっ」

「ひゃんんっ！」

思わず艶めかしい声を奏でてしまう。

ブラ越しにさわってくるだろうと思っていた彼が、いきなりブラをズリあげて胸に幼い顔を埋め、尖っていた乳芽に吸い付いてきたのだ。

初めてだと分かる乳首への拙い愛撫。

しかし、必死に両手で胸を揉み。濃いピンク色の頂に舌を這わせてくれる彼の乳責めに嬉しさが込み上げ、抱き寄せるように両手で灰色の頭を掻き^{むし}耖る。

「ん……くすぐりたい……きやつ、強く噛まないで……」

艶めかしい声で囁きながら、胸を愛撫する彼を導く。

年下の可愛らしい男の子に愛撫を受ける。その背徳的な興奮に胸が熱くなり、貪られる乳芽が焦燥的な痒さで包まれていく。

「こ、こつちもお願ひ……」

「えっ、で、でも……っ!?」

胸を揉んでいた彼の右手に自分の左手を重ねて動かし、スカートを捲って黒い下着に触

れさせた途端。彼が驚いたように身体を震わせた。

「いいの、ここも砥意くんの手で……ンあああつ！」

手を重ねたまま腹部からショーツの中に差し込み、薄い草むらを掻き分けさせて濡れていた淫部に触れさせた瞬間。

大事な部分から切なくもムズ痒い悦流が走り、肢体をピクンと跳ねさせてしまう。

重ねたままの手は、淫部のさわり方を教えるように淫唇を掻き分けさせて秘粘膜を擦らせ、ヒクヒクと開閉を繰り返す秘孔に指先を近づけさせる。

「おねえちゃん、こんなところさわったら……」

グニユ……。

「あふつ、あふつうううううつ！」

戸惑う彼を無視して手を動かし、指を曲げさせて秘孔に挿入した直後。肢体中が甘くも切ない痺れに包まれ、艶めかしい声を奏でてしまった。

細い指を咥えた秘孔は開閉を繰り返して愛液を溢れさせ、膣壁が奥に向かって大きくなりながら、無数の膣粒の付いた襞を指全体にからませていく。

「うわつ、ここすぐきつくて、指が千切られちゃいそうだよ……」

「ふあ……、いいの、指がお腹の中を擦って……私おかしくなっちゃいそう……」
艶めかしい吐息を洩らしながら、肉欲を求めた肢体がもつと強い快楽を求める。

胸は大きく揺らして肉果実の柔らかさで砥意の顔を刺激し、彼の口にしゃぶられている乳芽を、もっと強く吸うように無言でねだってしまった。

指を咥えた秘孔はよりきつく根元を締め付けてしまい、まるで彼の手を使ってオナニーでもするように細腰を前後させて、淫らな音を鳴らしてしまう。

部屋には濡れた音と溜香魅の熱い吐息が木霊し、二人の重ねた手で歪に膨らんだ黒い紐ショーツの底から、ポタポタと布が吸収しきれなくなった愛液が滴り落ちていく。

「ああっ、あっ……はあはあ……こんな……もう我慢できない……」

大男に嬲られ、契約で軽い絶頂を迎え、年下の少年に愛撫をさせた身体が、もう切なさの限界だ。

秘孔はとまることなく愛液を溢れさせ、子宮が切ない収縮を繰り返す。

「と、砥石くん……お願い……もう我慢できないの……。これで……きやつ!!」

「お、お願いって言われてもっ!？」

驚く彼を可愛らしいと思いつながら股間をさわわり、ボタンを外してズボンを引き下ろした溜香魅は、目の前に飛び出してきたペニスに紫の瞳を丸くさせた。

太さはそれほどではないが、長刀に変化できる彼を物語るように肉幹が長い。

二十センチは軽く超え、確実に切っ先が子宮口に届く。

すこし皮が被った仮性なものも、持ち主の性格を反映しているようで可愛らしい。

「は、恥ずかしいよつ。ボクまだこういうこと……」

「大丈夫、私にすべて任せて……」

「うっ、うああああつ！」

自分でも大胆すぎると思いつながら美貌を彼の股間に寄せ、唇と舌を使つて半被りの皮を剥き出した途端。彼が可愛らしい声で呻いてくれた。

すこし強引な皮剥き。しかし、自分の口で彼が感じてくれているのが分かつた彼女は、長いポニーテールを揺らしながら丹念に肉幹を舐め、初々しい色の亀頭に舌を這わす。

口淫で切っ先を責められた砥意は、舌を動かす度に「うっ」と短く呻いて身体を震わせ、秘孔に挿入した指を小刻みに動かしてくる。

「んチュパっ……んん……んふあむ……んふうう……」

しよっぱさと苦味を舌尖に感じながら亀頭を完全に剥き出し、そのまま啜えて頭を上下に動かすだけで、切っ先から溢れたカウパー液の味が口腔に広がる。

年下の少年に奉仕をする肢体は、背徳的な興奮で燃えているように熱くなり、白い肌に発情の汗を流し始めた。

「い、いいかしら砥意くん……」

「……う、うん」

ペニスから口を離して彼に尋ねると、幼い顔を真っ赤にさせて頷いてくれた。

「好きよ、砥意くん……」

つい数十分前に出会ったばかりなのに、自然とその言葉が出てしまう。

しかし、それが自分の本当の気持ちだと分かる。

彼と出会い、契約し、奉仕をした身体が激しくこの少年を求めている。まるで、自分の足りないところを埋めてくれる存在。

生まれ変わる前から、彼と結ばれることを約束されていたような気分だ。

「私がするから……ひゃんッ?!」

彼をベッドに仰向けで寝かせ、黒い紐ショーツを脱いで股間を跨いだ瞬間。下からスカートの中を覗きこんできた視線に秘孔が反応し、愛液がプシュッと吹き出した。

「私がおんなことをするなんて……んあっ、んん……っ」

なにも分からない童貞少年を、自分が誘惑してセックスをする。

復讐と鍛錬しか考えていなかった自分が、淫らな行為を抵抗なくしてしまう。

そんな現実には戸惑いながらも、溜香魅は雄々しく天を向いたペニスに秘孔を当て、ゆっくりと膣内に迎え入れた。

「あっ……入って……入ってくるっ。私の中に砥意くんが……ふあああっ」

「うあっ、すごい……これが女の人の中……っ!」

腰を下ろすにつれ、膣壁を押し広げて肢体に突き刺さってくるペニスに、全身が喜びで

震えていく。

「ふう……熱いのが……あつ……ひゅんんんんんッ！」

「お、おねえちゃんっ。そんなに一気にされたら……あつ、うあああああああつ！」
びゆるるっ！　びゆる……びゆるびゆるびゆるびゆるびゆるっ！

騎乗位で年下少年の長いペニスを膣内に迎えた直後。

秘孔と膣壁を広げて膣襞を擦ってきた亀頭の感触に、瑠香魅は膝が崩れて一気に砥意の上にお尻を落としてしまった。

長い彼のペニスは、膣壁と襞を激しく擦りながら子宮口を持ち上げるように突き上げ、初めての膣内感触に耐えられずに精液を迸らせている。

「ふうああッ!!　熱い……熱いのがもうお腹の中に……」

処女を奪われたとき以来の精液の熱さと粘液の感触に、思わず美貌を蕩とろけさせる。女を自分のものにしようとする男の体液。

陵辱によってその感触を肢体に刻まれた彼女にとっては、おぞましさを感じるほど忌むべき粘液だ。

しかし、灰色髪の少年のそれは、決して嫌な感触ではない。

自分から望んでペニスを迎えたこともあって、全身が震えるほどの歓喜を感じる。肉幹の鉄のような硬さも火傷するような熱も愛しく感じ、膣内に飛び跳ねる灼熱の粘液

をもっと欲しいと願ってしまおう。

「あッ、ああ……いいの……もっと、もっと出して……碓意くんので私をめちゃくちやにして……」

ヂュプ……ジュプジュプ……ジュプッ……ジュプッ……ジュプッ……ジュプッ……

射精しても萎えないペニスに、留香魅は長いポニーテールを靡かせながら肢体を上下させ始めた。

秘孔からは淫らな水音が鳴り、彼女の部屋に響いていく。

「うわっ、おねえちゃんっ。そんなにしたらボク……ボクまた……」

「あふッ、い、いいの……好きなだけ出して……私の中にいっぱい……」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプジュプッ！

長いペニスに膣壁がからまり、舐めるように肉幹を刺激しているのが分かる。

腰は左右にくねりながら何度も彼の股間の上でお尻を上下に動かし、大きな胸を千切れるほど揺らして自ら揉み、淫らに形を歪ませる。

「あふッ、ンあああッ！ すごい……すごい……奥に何度も当たって……わたしおかしく……あッ、あッ、ひゃふうううッ！」

熱い少年のペニスが膣内で動き、襞を掻きまくりながら子宮口を突き上げてくる度に、ムズ痒くも焦燥的な痺れが全身を駆け巡り頭の中を白くさせていく。

唇を噛み締め、染まり始めた美貌を背ける。

手はパートナーとの絆を確かめるように、武器化したままの彼を強く握り、肉欲に流されないように自分を保つ。

「やはり若い娘は格別じゃ。どれ乳の具合でも……」

「ひゃうっ!？」

突然老人が触手のように舌を伸ばし、ボタンの隙間からブラウスの内部に侵入させてきた。

生暖かくもヌメリとした軟体動物のような感触に、瑠香魅は生理的な嫌悪を感じながら美貌を歪ませ、胸に近づいてくる舌先に背筋を震わす。

「や、やめ……気持ち悪いわ……そんなもので胸を……ンふううううっ!」

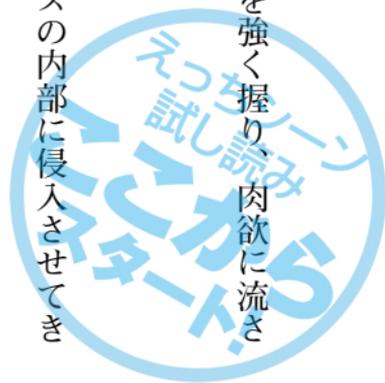
拒否している中。捕食する蛇のように素早く動き、黒いハーフカップブラの中に潜り込んで乳芽を舐められた感覚に、彼女は長いポニーテールを揺らして呻いた。

ガラガラとした舌は、まるで女の感じ方が分かるように乳輪を辿り、尖った頂に巻き付きながら唾液をまぶして転がしてくる。

「んあっ、っ……はふあっ」

堪えようとしても、声が勝手に洩れていく。

生暖かくて軟体の舌に弄ばれる乳芽からは、官能的な悦くすぐったさが生まれ、肢体全



体を疼かせて肉交を求めさせられてしまう。

瑞々しい肌はポツポツと汗を滲ませて赤くなり、ヌルヌルとした年老いた男の唾液をまぶされた乳芽が、もつと強い刺激を求めて疼きだした。

触手に巻き付かれた両脚は、内腿筋をピクピクとさせながら浮き上がり、男を欲情させるように全体を震えさせている。

「あつ、んっ……… 砥意くん……… はあはあ………」

潤み始めた紫色の瞳で長刀を見つめ、自分を律するように強く握って心を保つ。

だが、年下の少年を何回も求め、膣内射精とともに絶頂を繰り返した肉体が、もう快楽を拒めない。

肌は呼吸とともに発情の汗を滲ませ、舌と手で舐め揉まれる肉果実が、激しい切なさど焦燥的なくすぐぐったさで包み込まれていく。

黒い紐ショーツの中は蒸した女熱が充満し、愛撫に反応した膣が蠕動を開始して秘孔を蠢かせ、少しずつ愛液を滲ませ始めた。

（感じたくないのに……… こんな、こんな下劣なヤツなんか………）

老人に感じてしまう自分の身体に、怒りさえ込み上げる。

しかし、愛撫される身体は、そんな気持ちを見無視して男を求めだしていた。

胸は呼吸とともに大きく揺れて、制服越しに揉む両手に肉果実を押し付け。ブラの中で

違った頂が、震えながらザラザラとした舌触手に擦りついていく。

貫かれる快楽に待ちきれなくなった膺は早くも大きくうねり、小さく開閉を始めた秘孔から愛液を溢れさせて、黒い布を湿らせてしまった。

「んっ、はあはあはあ……んうううっ！」

切れ長な瞳をきつく閉じ、唇を噛み締めながら長いポニーテールを揺らして肉欲に抗う。

「ひゃひゃ、ずいぶんと感じているようじゃ。ならば、もうよかろう」

伸ばした舌で乳芽を転がし、樂しげに口元を歪めた老人がそう口にした直後。

突然一本の触手が彼の股間から伸び、浮き出していた内腿筋を切っ先で撫でながら、短い制服スカートの中へと侵入してきた。

「や、やめ……っ!!」

おそろく、本物のペニスを伸ばした触手。

その陵辱器官の目的に息を飲んでしまう。

女を犯すその触手は、何の遠慮もなしにショーツに触れ、切っ先を器用に動かしてクロッチから黒い布の中に入り込んできたのだ。

本物のペニスと同じく鉄のように硬く灼熱したその触手は、濡れた淫唇をくすぐるように擦りながら掻き分け、ヒクヒクと口を開閉させている秘孔に触れてくる。

「もうこんなに濡れていたとは、いやらしい小娘だ。この儂がおしおきをして差し上げよ

う」

「や、やめなさいっ！ そんな汚いモノで私をつ!!」

ジュプッ！ ジュプジュプジュプジュプウウウウウウ……。

「あくっ、や……はふうううううううううううッッッ！」

いきなり秘孔を突き刺し、膣内を拡張してきた触手に、溜香魅はおとがいを仰け反らせながら嬌声を張り上げてしまった。

心ではどんなに否定しても、秘孔を広げて膣壁を掻き捲りながら膣内を擦ってきた陵辱器官に、肉体すべてが悦痒く痺れ歓喜してしまう。

パートナーのペニスよりも奥を突き上げてくる人知を超えた長さの触手は、体内で子宮を持ち上げるように動き、器用に亀頭状の切っ先を振って子宮口を擦ってくる。

「ふあッ、あッ……なんなのこれッ。奥で……奥で動いて……おかしくなる……私がおかしく……ああッ！ あッ、あッ、あッ、ひゃふううッ！」

切れ長な瞳が潤み、唇から快樂の音が洩れていく。

奥まで挿入されたまま、執拗に亀頭で子宮口を擦られるという初めての刺激に、大の字に拘束されたままの肢体は何度もくねり悶え、ひるがえるスカートの裾が触手の形を陰影させるショーツをビル明かりの下に晒す。

幾多の少女が気絶し、倒した不良オラクルが呻くビル裏には、溜香魅の喘ぎ声と濡れた

挿入音が木霊し、再び陵辱された事実を彼女の心に刻み込む。

「ま、また私……犯され……犯されて……ううッ！」

悲しみに頬に涙が伝う。

拒む心を無視して肉悦を感じさせられた肢体は、ピストンを始めた触手によって揺り動かされ、肉体を傷つけさせないように溢れた愛液が紐ショーツに染み込んでいく。

「いいのう、この締め付けは。決めたぞ、おまえは僕専属の娼婦にしてやろう」

「な、なにを言つて……あうッ!? はうッ、んあッ、ああッ！」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプジュプッ!

いきなり触手のピストンが速くなり、秘孔を激しく捲り返されながら子宮口を突き上げ始めた。

今にも子宮口を貫かれそうな陵辱に、留香魅は顎を仰け反らしたまま喘ぐことしかできず、大きな胸を上下に弾ませてしまう。

彼女の足元には、上から飛沫してきた愛液がコンクリートの地面を濡らし、今にも淫らかな水溜まりを作り出してしまおうだ。

「行くぞ小娘。僕の精液で達してしまうがよい」

「い、いやッ! こんな……こんな人に出されるなんてッ。私は砥意くん……はふうあッ！」

突き上げられる衝撃で、もう言葉が上手く出せない。

強制的に感じさせられる子宮口は強烈な悦痺れを起こし、頭の中を真っ白に染めながら絶頂へと駆け昇らせていく。

「儂がぶちまけたあととは、部下の相手もしてもらどうぞ小娘っ！ ひゃひゃつ、うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃつ！」

「やッ、助け……中には……くうんんんんんんんんんん————ッ！」

子宮口を激しく突き上げられた衝撃で、一気に肢体全体が強烈な肉痺れに襲われ始めた。膣は激しく蠕動して触手を締め付け、収縮する子宮口が精液を求めて亀頭に吸い付いてしまう。

下腹部から伝わってきた悦流に貫かれた頭は、一瞬で真っ白な霧に包まれて思考を停止させ、秘孔と肉幹の隙間から大量の愛液が吹き出してコンクリートの地面に降り注ぐ。

「うあッ！ あッ……あッ……あッ……」

絶頂で身体に力が入らず、強く握っていた長刀が手から離れる。

「イキおったかこの淫乱小娘。次は儂の番じゃっ！」

「あッ……ふうああッ！ あふッ、やッ、んひいいいッ！」

再び触手をピストンさせ、孕ませるように子宮口に切っ先を詰め込んできた瞬間。

「おねえちゃんっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>